

《大谷地下美術展 ダブルバインド空間—その美しき回廊》について

私たちの生活を取り囲むいろいろなものは、何らかの目的の上に作られています。大きなものでは建物、道路、家、そして公園、小さなものでは家具、食器などの調度品など、まさしくそういったものの代表といえるでしょう。

この何に使うか、或は何に使われるかという目的は、それを作る際に最も重要な要素となり、またそれによってどのようなものを作るかということが決まります。

例えば、建物であったなら、どういった目的で使い、どのような大きさにするかということです。

都市や街はまさにそういったものによって構成されています。この目的の集合とでもいえる環境の中で私達は日々の生活を送っているのです。

ここで私が問題にしたいのは、そうした目的が、私達のまなざしがとらえる多くのものを、切り捨てたり隠ぺいする働きをしているのではないかということです。

例えば私がある絵を見に行くとします。どうせ会場は混むであろうから、なるべく人のいない時間にすばやく見てこようと考えます。こうして目的の上に設定された計画に基づき行動し始めます。会場に向かう間にも、私の目には多くのものが映り、そして景色は流れていきます。頭の中は早く早く会場へ、という考えでいっぱいです。やがて会場に着くと、多くの絵があります。大勢の人が来ないうちに見てしまおうと、急いで順路を歩きます。やがて出口となり、会場から外へ出ます。その時、目的を成し遂げた実感とは別に、私はいったい何を見ていたんだろうという不安が一瞬よぎります。しかし、絵を見たんだと言い聞かせ、次の目的に向かって行動を開始します。—これは極端な例ですが、こうした経験は多くの人が持っていると思います。

これは、私達が多くのものを見ているにも関わらず、ある目的にとって余分なものが排除されてしまっているということではないでしょうか。

建物などもそうしたことがいえます。とういう目的かで、その外装や内装や大きさが考えられます。映画館なら、なるべく映画に集中できるように作られています。

このようなことは大変便利なのですが、目的以外のものは見えにくいといえます。そしてそれは不自由とも考えられます。私達の生活は、こうした中で営まれ、不自由と感じることも、「便利」ということに見事にすりかわるようです。しかし、私達のまなざしは本当はもっと多くのものを見ているはずですし、それを欲していると思います。

作家の多くの人が見ているもの上に立って何かを創るのではなく、多くの人が見落としているものを見てています。

大谷地下採掘場跡は、結果として出来上がった空間であり、何らかの目的の上に作られたものではありません。私達がこの空間から受ける印象の多くは、確かに私達が都市生活の中で規制されてきた見ることへの本質的問題提起を考えることができます。

なぜならこの空間は、大谷石を切り出したあと的人工の空間ですが、どことなく自然の空間にも感じられます。また屋内空間ですが、野外のようにも感じられますし、開放的な空間にも閉鎖的な空間にもとらえられます。このように、この空間は一方的な意味付けを否定してしまう空間といえるからです。

私は、今回の展覧会において、この空間を〈ダブルバインド空間〉と規定しました。では、なぜ、装飾も何もないこの〈ダブルバインド空間〉が美しく魅力的に見えるのでしょうか。それこそ、まさしくこの空間のもつ特性において、私達のまなざしが不安定な状態に置かれるからではないでしょうか。それは、さきほど述べたように、一方的意味付けを否定してしまうようなことによると思います。この不安定な状態こそがまさに多くのものを見れる、開放された状態と考えられます。そこでは私達はすべてのものを見ようとします。それはある目的において、切り捨てられる関係とは異なり、反対にその目的の所在は何であるか、ということをも投げかけてくれます。

この展覧会の主旨もそうしたところにあります。細分化され、専門化されている現代、多くの専門家やメディアは、私達にものの見方や考え方を教えてくれます。そのことは大変「便利」ということです。しかし、私達のまなざしは、もしかしたら見ることをやめてしまっているのではないかでしょうか。社会や制度が持つまなざしへ、あたりまえのように関わってしまうということは、そのまなざしの上に“芸術”があるとすれば、それは見ないことで出来上がった“虚妄の芸術”ではないでしょうか。

私達は、この展覧会を通じて、私達を取り囲む多くの環境に潜むまなざしへの介入を告発して、開放されたまなざしが創る芸術を実践したいと考えています。

大谷地下美術展事務局

ギャラリーサージ 酒井信一

※ダブルバインド=二重拘束